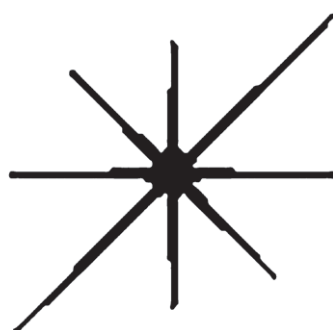


コメット通信 62

['25 年 9 月号]



comet book club

éds. de la rose des vents - suiseisha

目次

ファシズムと帝国的性暴力

——「物語化」の陥穽を眺める

内藤千珠子——3

終戦 80 年目の余波のなかで、戦時の絵画を考える

——生き延びながら抗うこと

岡村幸宣——5

国家とコリアン・アーティスト

——「日韓国交正常化」, 「戦後」の意味を在日朝鮮人美術史から問う

白凜——7

カルト／文学

——「彼ら」と「私たち」の距離をめぐって

菊間晴子——9

九州派と「サークル村」の女たち

——田部光子・森崎和江・石牟礼道子を結んで

渡邊英理——12

ファシズムと帝国的性暴力

——「物語化」の陥穽を眺める

内藤千珠子

2023年に大きな衝撃をもって受け止められたジャニーズ問題は、2025年になって元ジャニーズタレントたちによる性暴力的な問題が相次いで取り沙汰されるに至り、ある種の忘却を伴いながら、新たな展開を見せているようだ。アイドルという存在を取り巻くエコノミーにおいて、性暴力の「被害者」としてイメージされていた側が、「加害者」としてスキャンダルの登場人物と化す。メディアのなかに立ち現れたスキャンダラスな物語は、別の新しいスキャンダルによって上書きされ、消費され、ゆるやかに忘れられていく。

しかしながら、アイドルを志した少年たちが被害者となった出来事と、その後、男性アイドルが加害者として問題視された出来事はともに、性的消費と地続きになった性暴力が、他者を支配する権力の様式そのものであることを、社会のなかに可視化しているのではあるまいか。

留意すべきなのは、それぞれの出来事は、現実的に被害を被った人々の痛みを伝えるものであるものにもかかわらず、傷つけられた側に寄り添って何かが受け取られる前に、わかりやすい物語に置き換えられてしまうことである。性的欲望、恥や痛みの情動など、個々の身体と結びついた要素を資源化するようにして、スキャンダラスな物語が前景化する。物語となってしまった出来事は、理解可能な定型に横領されるほかはない。

このような物語化の力学にあらがうことは困難かもしれないが、それでも、その物語を支えている暴力の構造を知ることにはできるはずだ。性的消費と地続きになった性暴力は、近代の帝国主義的な暴力の延長に広がった文化様式であり、帝国的性暴力と呼ぶべきしくみを備えている。それは、軍事主義や家父長制と結託したナショナリズムや、ミソジニーを貼り合わせたホモソーシャルな連帯、レイシズムを前提とする植民地主義を、日常的で個別的な出来事のなかに現象させ、暴力を暴力と思わせない感性を生成させ続けてきた⁽¹⁾。

だからこそ、近代社会のなかで、セクハラやDVは問題視すべき暴力とはみなされてこなかったし、女性やマイノリティが性的に消費されることは暴力と名指すべき問題ではなかった。同じように、アイドルを目指す少年が絶対的な権力者から性的に搾取されることは、告発すべき暴力とみなされなかったのだ。それらは、社会生活を営む上で生じることがあるネガティブな要素だが、当然誰もが経験せざるをえない出来事であり、被る側がバランスを取ってうまくやり過ごせばよいこと、すなわち、問題化しても仕方のない瑣末な事柄として軽視されてきた。したがって、出来事に気づいたとしても、誰もが知っている公然の秘密として、見て見ぬふりをするのが一般的な所作とされてきたのだった。帝国的な規範は、暴力が暴力に見えない感性にシンクロすることを、人々に要求するのである。

「ジャニーズ問題」とは、このような帝国的性暴力のしくみを社会に鮮明に伝えた出来事であった。性的に他者を消費する暴力が、権力の発動として理解される文化に、すべての人々の身体がつなげられ、わたしたちはそのような世界を生きさせられている。傷つきやすさや脆弱さをもつ身体は暴力の宛先におかれ、逆に、支配する権力を帯びた身体は、自らを、暴力の加害行為へと容易に委ねてしまうことになる。したがって、誰もが容易に同調させられてしまう暴力の回路に意識を向けることが重要だろう。近代にあって、帝国的性暴力は暗黙の前提として社会が共有する規範であり、人々はその

規範に同調するよう促されてきたのだ。性暴力的な出来事をスキャンダルとして矮小化したり、既知の定型として消費したりすることは、目撃したはずの衝撃を緩和し、忘れさせ、暗黙の前提へと転化し、規範が求める暴力のサイクルを強化することを意味している。

加えて、ファシズムが勢いを増す現代社会では、レイシズムとミソジニーが強固に結びついた排外主義的な言説が主流化しつつある⁽²⁾。帝國的性暴力の回路は、いまや、差別を差別と思わせない感性を育んでいるといわなければならない。

このような問題について、フィクションを経由して考えさせてくれるのが、村田沙耶香の大作『世界 99』⁽³⁾である。『世界 99』は、憎悪と同調圧力から成る現代日本のファシズムを、「ラロロリン人」「ピョコルン」というふたつの架空の記号を用いて描き抜いた小説である。語り手の「私」は、同調を強要する世界の法に最適化していく女性として設定され、意志や自我はもたず、相手と場の要求に応じて複数の「私」というキャラクターに成り代わる。ラロロリン人はレイシズム、ピョコルンはセクシズムやミソジニーを象徴するために創出された記号と読むことができ、両者は密接に関連づけられている。

小説のなかの「私」は、自分を放棄し、最適な同調を実践し、忘却する力によって生き抜こうとするが、その生の軌跡には、ファシズムの暴力をくぐり抜けるためのヒントが見え隠れする。現実をフィクションの次元へと移行させ、ファシズムの暴力のしくみを克明に描出した小説テキストは、直視することの難しい現実世界の絶望を、フィクションを媒介にすることで見つめ返す力を与えてくれるだろう。

【注】

- (1) 帝國的性暴力の構造やジャニーズ文化との関連、アイドル文化とナショナリズムが連結した問題については、拙著『「アイドルの国」の性暴力』（増補版、新曜社、2024 年）で詳述した。
- (2) ファシズムの論理を支えるレイシズムとミソジニーについては、シャン・ノリス『反中絶の極右たち』（牟礼晶子訳、明石書店、2024 年）を参照。
- (3) 村田沙耶香『世界 99』上下巻、集英社、2025 年。

執筆者について――

内藤千珠子（ないとうちずこ） 1973 年生まれ。現在、大妻女子大学文学部日本文学科教授。専攻＝日本語文学、ジェンダー研究。主な著書に、『「アイドルの国」の性暴力』（増補版、新曜社、2024 年）、『愛国的無関心――「見えない他者」と物語の暴力』（新曜社、2015 年）などがある。

終戦 80 年目の余波のなかで、戦時の絵画を考える

——生き延びながら抗うこと

岡村幸宣

今夏の東京国立近代美術館の企画展「記録をひらく、記憶をつむぐ」が、ポスター、チラシ、図録を作れないという異例の開催となったことは、欧米列強をモデルに殖産興業、富国強兵を進めた「近代化」と、天皇神話に基づく国粹的な「伝統」に立脚した大日本帝国の破綻から 80 年の歳月を経てなお、その余波が私たちの社会に深く影響していることをあらためて感じさせた。

帝国の制度に組み込まれながら「近代化」した芸術も総力戦の一翼を担い、藤田嗣治《アッツ島玉砕》や中村研一《コタ・バル》、鶴田吾郎《神兵パレンバンに降下す》などの「作戦記録画」が描かれた。それらの絵画は敗戦後に米軍に接収され、1970 年に「無期限貸与」の扱いで「返還」された後は東京国立近代美術館が保管している。近年は銃後や占領地、歴史、宗教などを主題にした広義の「戦争画」の研究も進み、「記録をひらく、記憶をつむぐ」の展示内容も、その蓄積を反映していた。

第 6 章「身体の記憶」には、丸木位里と丸木俊（赤松俊子）の共同制作「原爆の図」の第 2 部《火》の再制作版⁽¹⁾も展示されていた。「原爆の図」は戦後に「平和」を希求して描いた作品として、戦時の絵画との対比が際立っていたかもしれない。とはいえ俊は、北海道の屯田兵の開拓村、言い換えれば入植者のコミュニティに生まれ育ち、帝都・東京に出て西洋技法の油彩画を学んだ画家であった。日米開戦前年の 1940 年には、ゴーガンに憧れて大日本帝国の統治下にあった「南洋群島」を単身で旅し、パラオやヤップの島の人たちの姿をスケッチや油彩画に描いている。こうした経歴は、帝国の制度の特権を享受していたと見ることもできよう。しかし一方で白樺派などの人道主義の影響を受け、生活綴方や自由画運動の実践教育にも関わり、階層的な偏見にとらわれず南洋や朝鮮の人たちと交流した。南洋から帰国後に雑誌等で発表したエッセイを読めば、日本人の抑圧的な態度に反感をもち、統治される側の人たちに共感していた心情が伝わる。1941 年には燐鉱石の採掘場へ出稼ぎに行く島の若者たちの倦怠感に満ちた絵画《アンガウル島へ向かう》も描いている。しかし、ほどなくエッセイの仕事は来なくなり、つまり自身の言葉を奪われ、他人の言葉に絵を添える仕事ばかりが増えていった。海軍から従軍の依頼が来たときには偽病の診断書を提出して断った⁽²⁾が、大日本帝国の南進政策に添った絵本の挿画は手がけた⁽³⁾。その仕事は、のちに「原爆の図」の画家の「戦争協力」と批判されるものになったが、時系列に沿って選択肢を奪われていく状況をたどれば、どうすれば良かったのか、と答えの困難な問いにも突き当たる。

米国の研究者シャーロット・ユーバンクスは、迎合と抵抗のはざまに揺れる俊の活動を「Persistence」と定義した⁽⁴⁾。「Persistence」の適訳はなかなか見つからないが、「粘り強さ」や「持続性」といった意味をもつ。生き延びながら抗う、といったニュアンスだろうか。

戦後の俊は、位里とともに「原爆の図」に取り組みながら、各地の民話の絵本を数多く手がけた⁽⁵⁾。戦争に対する反省から、国粹的な神話に抗うために、地に根ざして語り継がれた物語を大切にしたいという思いはあっただろう。みづから「大衆が描かせた絵画」と語った「原爆の図」もまた、核時代における「Persistence」であり、忘れてはならない記憶を伝える「現代の民話」であったかもしれない。

戦時の絵画をめぐる問題は、構造的な社会の抑圧のもとで、個人がどのようにふるまうかを私たちに考えさせる。それは決して遠い過去の話ではなく、80 年目の余波のなかで、私たちがどう生き延

びながら抗うのかという、生々しい現実に通じる問題である。

【注】

- (1) 会期前半のみ展示、後半は第3部《水》の再制作版を展示。いずれも原爆の図丸木美術館の所蔵する連作ではなく、広島市現代美術館が所蔵する再制作版。
- (2) 俊は、海軍から「軍艦に乗って南方へ行ってくれ」という話があったが、「戦争を讃美する絵を描く気になれなかった」ため、肺浸潤の診断書を出して断ったと回想している。丸木俊子『生々流転』、実業之日本社、1958年、225頁など。
- (3) 『ヤシノ木ノ下』（文：土家由岐雄、小学館、1942年）、『ヤシノミノタビ』（文：丸山薫、帝国教育出版部、1942年）の挿絵によって、のちに俊は「戦争責任」を問われた。宇佐美承『池袋モンパルナス』、集英社、1990年、452-457頁。
- (4) Charlotte Eubanks, *The Art of Persistence: Akamatsu Toshiko and the Visual Cultures of Transwar Japan*, University of Hawai'i Press, 2020, pp.4-7.
- (5) 民話を題材に俊が手がけた絵本は多数あるが、代表作は松谷みよ子の文に位里とともに挿画を描いた『日本の伝説』全5巻（講談社、1970年）で、1971年に第3回ブラティスラヴァ世界絵本原画展のゴールドエンアプル賞を受賞している。

執筆者について――

岡村幸宣（おかむらゆきのり） 1974年生まれ。現在、原爆の図丸木美術館学芸員。専攻＝丸木位里・丸木俊夫妻を中心にした社会と芸術表現の関わり。主な著書に、『未来へ――原爆の図丸木美術館学芸員日誌2011-2016』（新宿書房、2020年）、『《原爆の図》のある美術館――丸木位里、丸木俊の世界を伝える』（岩波ブックレット、2017年）などがある。

国家とコリアン・アーティスト

——「日韓国交正常化」、「戦後」の意味を在日朝鮮人美術史から問う

白凜

美術史は基本的に様式の歴史である。バロック、ロココ、印象派など。何がどのように描かれているのかと使った材料が明確であれば事足りる。作品のとなりのキャプションに、作家名と制作年だけが書かれてある場合もあり、それで充分鑑賞することができる。それなのになぜ人はアーティストをめぐるエピソードを知ろうとするのだろうか。美術史に、アーティストの来歴や経験、人と人とのかわりの説明は必要なのだろうか。

先日東京で、大韓民国の画家を取り上げている展示を観た。「日韓国交正常化 60 年」を受けてのことだろう。私も、数多くのコリアン・アーティストのなかから何人かを挙げてみたい。ナ・ヘソク（羅蕙錫, 1896-1948）、チョン・ジョンヨ（鄭鐘汝, 1914-1984）、イ・ジュンソプ（李仲燮, 1916-1956）、クォン・ジンギョ（権鎭圭, 1922-1973）、ピョ・セジョン（表世鐘, 1929-）。共通項は朝鮮半島で生まれ、日本で学び、朝鮮半島に戻って、そこで生涯を終えているという点である。「戦後 80 年」を受けて、戦争や植民地と、現在とを関連付ける催しも見られる。いま挙げたアーティストたちの後代への影響を振り返ってみよう。ナ・ヘソクの女性としての社会への問題提起や、イ・ジュンソプの家族への深い愛情を表した手紙は、すでによく知られており、一人の人間としての生き様が、多くの人の感動と共感を呼んでいる。チョン・ジョンヨは朝鮮戦争中に活動の拠点を大韓民国から朝鮮民主主義人民共和国に移し、朝鮮画を描くアーティストとして名を残した。クォン・ジンギョとピョ・セジョンは、解放後に日本で学び朝鮮半島に戻っている。前者は大韓民国へ、後者は朝鮮民主主義人民共和国へ。

かれらの軌跡を、日本で生涯を終えたコリアン・アーティストとつなげてみると、クォン・ジンギョについては、その魅力の重要な一部分を在日コリアン 2 世のアーティストたちが記録している。ピョ・セジョンにかかわるエピソードは、かれと親しく過ごしたソン・リシク（成利植, 1930-2016）が、1950 年代の在日コリアン・アーティストの活動を交えて筆者に語ってくれた。チョン・ジョンヨの朝鮮民主主義人民共和国での活動については、ハン・ドンフィ（韓東輝, 1935-2020）が、在日コリアンが学んだ朝鮮画技法と合わせて教えてくれた。ハンが東京からピョンヤンのチョンを訪れた際、二人が朝鮮戦争以前に過ごした朝鮮半島の南側での思い出を語り合ったそう。民族への抑圧と、解放、そして分断を経験し、愛する故郷を思いながら「民族の美術」を追い求めた、国境を越えたエスニック・コミュニティの軌跡である。

約 80 回のインタビューで在日朝鮮人 3 世の私が聞いた先代のエピソードは、侵略と植民地支配、同化と差別、冷戦、そして戦後を「国家」の狭間で生きざるを得なかった人たちの物語であった。どの国、どの言語、どの展覧会、どの表現……と常に選択を迫られた者たちが全身で受け止めた事実と、痛みを伴う決断の集積。言葉を選びながら話す姿に、解放から数十年経っても語りつくすことのできない悲しみや絶望があるのだろうと、胸が痛んだ。聞いた者の責任としてこれを綴る私が今深く感じることは、在日朝鮮人という自分自身のルーツとつながる大事なものがいままさにこの瞬間にも失われているのではないかという焦りと、この地球上の人と人とのあいだの争い、特定の民族を根絶やしにしようとする狂気、望まない移動を強いられる人々の姿をいつまで目撃しなければならないのだら

うという恐怖である。声を潜めて生きることを強いられる人たちのなかに芸術を愛する人がいて、魅力的なアーティストと美術作品の創造があり、その存在の伝承を願う人が間違いなくいると、私は思うのである。

自分を表現する作品とそれを観覧する人々，アーティストを囲む仲間や家族，後世に託したい思いと願い，権力者による統治と分断，支配と破壊，無力な人々が迫られる選択，絶望……。あなたにとって，美術史に，抑圧を経験したアーティストの語りは必要ですか。

執筆者について——

白凜（ぺくるん） 1979年生まれ。現在，一般社団法人在日コリアン美術作品保存協会代表理事，同志社大学・京都外国語大学非常勤講師。専攻＝在日朝鮮人美術史。主な著書に、『在日朝鮮人美術史 1945-1962——美術家たちの表現活動の記録』（明石書店，2021年）などがある。

カルト／文学

——「彼ら」と「私たち」の距離をめぐって

菊間晴子

「カルト」とは何か

「カルト」。現代社会において、様々な場面でこの言葉を耳にする機会が増えたように思う。2022年7月の安倍晋三元首相銃撃事件によって注目を集めた旧統一教会問題は、「カルト」の脅威について人々が再考する大きなきっかけになった。

しかし、「カルト」という言葉が指すものの曖昧さについては、宗教学者などの識者も認めるところだ。『徹底討論！ 問われる宗教と“カルト”』のなかで、日本脱カルト協会顧問も務める川島堅二は、「マイノリティ集団で、熱狂的な崇拝行為を実践している団体で、関わってしまうと違法行為や反社会的な行為に巻き込まれて、自分も不利益を被るし、社会や身近な人々に対しても不利益を被らせてしまうような団体」⁽¹⁾のことを、自身は「カルト」と捉えていると語る。しかしこの定義では、求心力の高い「宗教」と「カルト」の差はほとんどなく、それが自分たちの社会規範から逸脱し「不利益」をもたらす集団だと周囲が判断するか否かだけが、両者の分岐点であるように思える。実際、若松英輔は、「恐怖と搾取と拘束」という要素が加わりさえすれば「宗教」はすぐに「カルト」になってしまうと指摘している⁽²⁾。「宗教」と「カルト」は紙一重だという認識は、「私のように宗教学や宗教社会学を研究している立場、あるいは、おそらく法学の立場からも、カルトの定義は非常に難しい」⁽³⁾という島藺進の発言にもよく表れている。

また今日では、「カルト」という言葉が、過激で排他的な宗教的実践を特徴とする団体以外に対しても用いられている。特定の思想を共有し強く連帯するグループや、特定の対象を熱狂的に愛するファンダムも、外部からそのように称されることがあるのだ。この場合の「カルト」には、その団体が持つ危険性を批判するというよりも、彼らを揶揄する差別的な響きが含まれている。得体の知れない対象を、常識外れのやり方で信じている（ように見える）人々への恐れや蔑みが、その根底に渦巻いている。

記号としての「カルト」

このように、「カルト」という言葉の定義は茫漠としていて、しかもかなり多様化してきている。これは、現代社会を生きる人々が「カルト」のあり方について熟考することが少なく、それでいて、ぼんやりとした危機感や忌避感だけは共有していることの証であろう。

「カルト」は危険だと、「カルト」に巻き込まれないためにリテラシーを身につけるべきだと、皆が言う。その一方で、「カルト」と称される団体の構成員たちは何を考え、何に喜び、何に苦しんでいるのかについて、思いを馳せる機会ほとんどない。なぜなら、「カルト」という呼称が、「彼らは異常であり、私たちとは違う」ということを示すための便利な記号となってしまうからだ。しかし、その団体の問題点について考えようとするなら、彼らの行動が、強い求心性や排他性、あるいは暴力性を持つようになった背景に、一步踏み込んでいかななくてはならないはずである。つまり、「彼ら」を「私たち」から区別せずに、むしろそこにある共通点を探りながら、その感覚に迫っていくことこそが、本来求められる姿勢なのではないだろうか。「彼ら」と「私たち」の距離をそのままにしておく限り、状況

次第で「彼ら」と「私たち」の立場が反転する可能性も、常に残されているのだから。

「彼ら」と「私たち」を繋ぐ文学

その意味で、小説家・大江健三郎（1935-2023）が90年代に著した大作、『燃えあがる緑の木』三部作（1993-1995）、そして『宙返り』（1999）は、今日的な意義の大きい作品である。奇しくもオウム真理教による地下鉄サリン事件（1995）と前後して書かれたこの二作は、どちらも四国の小村を拠点に活動する——しかしそれぞれ別の指導者が率いる——新興宗教団体の物語だ。『燃えあがる緑の木』の教団が解散した後、その教団施設の跡地に『宙返り』の教団が移り住んでくる、という設定である。

『燃えあがる緑の木』と『宙返り』が取り上げるのは、「魂のこと」に関心を持つ人々が集い、山奥の小村に結成されたマイノリティ集団だ。当初は穏健な集団だったにもかかわらず、いつしかその一部が武装化を企てたり、テロリズムに突き進んだり、集団自殺を計画したり、という事件が起こる。まず間違いなく、外部から「カルト」と呼称され得る集団である（実際『燃えあがる緑の木』においては、教団が「子弟を奪還する会」からの抗議活動に直面するし、『宙返り』においては、教団が新たな拠点とした小村の住民たちとの間に軋轢が生じる）。

注目したいのは、教団の指導者、そしてそこに集まってくる人々の日常を、ごく丁寧に描き出す大江の筆致である。読者はこれらの作品を通して、登場人物たちが教団に関わる前の暮らし、そして教団のなかで日々直面することがらを追体験し、そこから生まれる心の動きを共有することになる。病や社会的挫折、大切な人の死、家族の不協和——。様々な問題を抱え、苦境に置かれた彼らの、「何かを信じたい」、「自分の生に意味を見出したい」という痛切な願いに触れた読者は、彼らが自分たちと何ら変わらない普通の人間であることを知る。彼らが極端な行動に突き進んだのは、誰しもが持ち得る感情・思考の暴走ゆえだということに、否応なく気づかされるのだ⁽⁴⁾。

「彼ら」と「私たち」を分断するのが「カルト」という記号だとすれば、「彼ら」と「私たち」を繋ぎ合わせることが、文学的想像力の役割ではないだろうか。「彼ら」を性急に断罪することなく、そこに作家の想像力を接続しながら着実に紡がれた物語は、「彼ら」の問題を「私たち」の問題として捉えるための足がかりを、読者に与えてくれる。「カルト」という記号が飛び交う時代であって、一見異質な他者への共感的接近、そして自らの生に引きつけたかたちでの検討を誘発する文学というメディアの有用性は、いまこそ高まっているように思われる⁽⁵⁾。

付記：本研究はJSPS 科研費 25K16169 の助成を受けたものです。

【注】

- (1) 島藺進, 釈徹宗, 若松英輔, 櫻井義秀, 川島堅二, 小原克博『徹底討論！ 問われる宗教と“カルト”』, NHK 出版新書, 2023 年, 21 頁。
- (2) 同書, 25 頁。
- (3) 同書, 23 頁。
- (4) 大江が同時代の新興宗教団体によるテロリズムに強い関心を抱き、その背景に文学的想像力を通して迫ろうとしていたことは、大江健三郎文庫（東京大学文学部内）所蔵の『宙返り』の自筆原稿と校正刷を検討すれば明らかである。著者は両者の比較を通して、一度は原稿に記されていたオウム事件の詳細

や、それを「卑小な自己防禦のためのテロリズム」などと評する直接的な批判のほとんどが、出版社への入稿前に削除されていたことを明らかにした。このような推敲を行った大江の狙いは、作品解釈を固定化してしまう「オウム真理教」という固有名を減らすことだけではなく、オウムの想像力を安易に切り捨てず、それを自らの想像力と重ね合わせて慎重に検討することにあつたと推察される。詳しくは、菊間晴子「大江文学における『魂のこと』とは何か——『書き直し』を手がかりに」（『大江健三郎を語る視座』（第22回東京大学ホームカミングデイ文学部企画「大江健三郎を語る視座」ブックレット）、東京大学文学部、2024年）を参照されたい。

- (5) フィクションに限らず、ノンフィクションや研究書などの領域にも、文学的想像力を喚起して「彼ら」への共感的接近を可能にする作品は存在する。たとえば、大洪水による世界滅亡を予言した女性を中心に組織されたアメリカの団体を詳細に調査した社会心理学の名著、L・フェスティンガーほか『予言がはずれるとき』（1956）だ。世界滅亡の時刻を目前に、彼らを救済するために空飛ぶ円盤がやってくることを信じていつまでも待ち続ける信者に対し、予言者が「緊張した甲高い声」で叫ぶ、「それでも、一つのプランたりとも、はずれることはありません」という言葉は、読者の感情を揺さぶる、血の通った切実さを帯びている（L・フェスティンガー、H・W・リーケン、S・シャクター『予言がはずれるとき——この世の破滅を予知した現代のある集団を解明する』、水野博介訳、勁草書房、1995年（新装版：2025年）、208頁）。

執筆者について——

菊間晴子（きくまはるこ） 1991年生まれ。現在、東京大学大学院人文社会系研究科附属次世代人文学開発センター助教。専攻＝日本近現代文学、表象文化論。主な著書に、『犠牲の森で——大江健三郎の死生観』（東京大学出版会、2023年）などがある。

九州派と「サークル村」の女たち

——田部光子・森崎和江・石牟礼道子を結んで

渡邊英理

1950年代末、戦後の九州でふたつの文化集団が産声をあげた。ひとつは、1958年に生まれた「サークル村」である。1950年代、職場や地域の人々がサークルに集い、文学、演劇、合唱、絵画などの集団創作や学習会を行っていた。戦後サークル文化運動が退潮期を迎える50年代後半、その起爆剤として、あるいはその後退をも積極的な契機に転化すべく、九州・筑豊炭鉱近傍でサークル交流誌『サークル村』は創刊された。編集委員は上野英信、谷川雁、森崎和江ら、事務局は、谷川と森崎、上野英信・晴子夫妻が軒続きに住む福岡県中間^{なかま}の長屋におかれた。

もうひとつは、前衛美術集団の九州派である。1956年11月に福岡県庁西側大通りの壁面を用いて「ペルソナ展」を行ったメンバーが中心となり、翌57年、桜井孝身、オチオサム、菊畑茂久馬、働正らによって立ち上げられた。九州派は、福岡で活動すると同時に、反中央・反東京を掲げて「読売アンデパンダン展」へ出品するなど、メンバーの作品展示のため東京へと乗り込んだ。東京への強烈な対抗意識と中央へのレジスタンス。「東京へゆくな、ふるさとを創れ」。その精神は、谷川雁の第一詩集にある「東京へゆくな」に呼応し共振するものでもあった。

九州派と「サークル村」の交流は、男たちに限られたものではない。それぞれの集団のうちにも巢食う家父長制の下で周縁化されていた女たちは、まさにそれゆえに互いに他に接触し交流し連なりあってもいた。九州派の田部光子は、谷川雁を訪ねた折には、「森崎さんとばっかり話して帰ってきた」と言い、「森崎さんのほうがずっと格が上」だとも語っている⁽¹⁾。田部は、筑豊炭鉱の文化運動・労働運動に関わっていた頃の森崎の代表的著作のひとつ『非所有の所有——性と階級覚え書』（1963）も読んでいたと言う。

田部と森崎との間には複数の出会いとすれ違いが揺らめいている。1933年、日本支配下の植民地台湾生まれの田部は、植民地朝鮮生まれの森崎と同じく「植民二世」である。1946年、田部は台湾から福岡に引揚げ、1951年に福岡県立浮羽高等学校を卒業すると、福岡の老舗百貨店である岩田屋に入社。1957年に福岡で結成された九州派に参加する。同年、田部は勤務先の岩田屋百貨店で労働争議によるロックアウトも経験している。田部はまた岩田屋でサークル活動を行い、済美会の絵画部に参加、岩田屋に入社する前には石炭会社にて、石炭の販売をしていたことも語っている。九州派を超えた独自の活動を長年にわたって行い、2024年3月に逝去した。

田部の《プラカード》（1961）には、同時代の三池闘争や安保闘争、公民権運動やコンゴ動乱など世界史的な政治運動への呼応が見られる。同作は、これら政治運動の「大衆のエネルギー」を表現しうるプラカードを、ポップアートの要素もいれつつ作品化したものだ。また田部の作品の特徴のひとつは、女性身体や「エロス」だ。《プラカード》とともに1961年の「九州派展」に出品された作品《人工胎盤》（1961）は、「エロス」をめぐる田部の代表作のひとつだ。内部は男性器を模した真空管で貫かれ、逆立ちにされたマネキンの腰部が三体、全体に釘が打ち込まれている。「人工胎盤があったら、自分がこんなに大きなお腹をかかえて苦しまんでもよからう」⁽²⁾。悪阻で苦しむ妊娠初期の気持ちから創作された田部のこの作品は、「産む性」とされる女性身体を女性自らが表象する。そこでの女性身体は、女たちに所与のものとして自然化された母性からも、男性の眼差しが描くエロティシズムか

らも逸脱している。男性という主人・主体に所有された性や身体、そして「エロス」を自らのものとするための女性表現だ。森崎もまた、男性という主人・主体に所有されている、被所有の性や身体を自らのものとし解放しようとする「エロス」を追究した思想家だった。

田部は、「サークル村」のメンバーだった河野信子とともに『夢劫の人——石牟礼道子の世界』(1992)も刊行している。同書は、プロローグに石牟礼とイバン・イリイチとの対談をおき、「第一部、夢劫の人」を河野信子が、「第二部、魚族の怒り」を田部が執筆している。装丁も田部の手によってなされている。田部は、第二部のタイトルと同題の美術作品《魚族の怒り》(1959)をすでに1950年代に発表している。《魚族の怒り》は、直接にそれらを主題としたものではないが、ビキニ環礁で第五福竜丸も浴びた死の灰による放射線被爆や、水俣の不知火海で有機水銀に侵された「魚族の怒り」と強い響きあいを持つ作品である。『夢劫の人』『第二部、魚族の怒り』の中でも、田部自身、それらとの符合や「予見」として《魚族の怒り》を捉えている。『夢劫の人』の「魚族の怒り」は田部による優れた石牟礼論であり、また、石牟礼・森崎が実践した聞き書きの言葉でもある。田部は、水俣病闘争に助太刀し加勢した人たちや石牟礼所縁の人たちを訪ね、その声を聞き、書き記している。

田部と森崎、石牟礼との接触と交流については、今夏上梓した『到来する女たち——石牟礼道子・中村きい子・森崎和江の思想文学』でも論じた。実は、本書の版元である福岡の書肆侃侃房には田部光子の絵がある。《Apple Zoo - Apple Series -》(1993)がそれである。木板のキャンバス。中央には網状の赤い球体の籠があり、中には多種多様な鳥や動物、昆虫たちがいる。それ自体が林檎のような赤い籠の周囲、キャンバスの四隅にも林檎が配されている。書肆侃侃房の創業者、田島安江が田部光子と交流していた所縁から、同社に飾られたものだと聞く。大分出身である田島が卒業した福岡女子大学(旧福岡女子専門学校)は、森崎の母校でもある。編集者であると同時に詩人でもある田島もまた、森崎や石牟礼、田部と同じく九州所縁の書く女のひとりであった。本書の刊行記念の会のために福岡を訪れた折に、編集担当の藤枝大氏がこの絵を見せてくれた。暑い7月、夏の日わたしはこの絵と対面した。田島と田部、ここにもわたしの接触と交流があると思った。そして、わたしもまた、その連なりの櫛をつなげていきたいと強く思ったのだった。



書肆侃侃房にある田部光子の絵——《Apple Zoo - Apple Series -》

【注】

- (1) 「田部光子オーラル・ヒストリー 第2回」(2010年11月28-29日、福岡県福岡市田部光子氏アトリ

エにて／インタヴュー：張紋絹，北原恵，小勝禮子，中嶋泉／書き起こし：小師順子／公開日：2014年8月24日／更新日：2021年3月17日）（http://www.oralarthistory.org/archives/tabe_mitsuko/interview_02.php）。田部光子については、以下の文献を参照した。小勝禮子「田部光子試論——『前衛(九州派)』を超えて」(初出：『美術運動史研究会ニュース』No.93，美術運動史研究会，2008年5月，再録：『田部光子 Recent Works2』みぞえ画廊，2012年，62-69頁)。「田部光子オーラル・ヒストリー 第1回・第2回」(2010年11月28-29日，福岡県福岡市田部光子氏アトリエにて／インタヴュー：張紋絹，北原恵，小勝禮子，中嶋泉／書き起こし：小師順子／公開日：2014年8月24日／更新日：2021年3月17日）（http://www.oralarthistory.org/archives/tabe_mitsuko/interview_01.php，http://www.oralarthistory.org/archives/tabe_mitsuko/interview_02.php）。正路佐知子「田部光子をひとりの美術家として語り直すために——田部光子展『希望を捨てるわけにはいかない』」(「artscape キュレーターズノート」) (https://artscape.jp/report/curator/10174601_1634.html)。

(2) 「田部光子オーラル・ヒストリー 第2回」，前掲 URL。

執筆者について——

渡邊英理（わたなべえり） 現在，大阪大学大学院人文学研究科教授。専攻＝日本語文学，批評／批評理論，思想文学論。主な著書に，『到来する女たち——石牟礼道子・中村きい子・森崎和江の思想文学』（書肆侃侃房，2025年），『中上健次論』（インスクリプト，2022年，第14回表象文化論学会賞）などがある。

水声社の新刊

(2025 / 9 / 30)

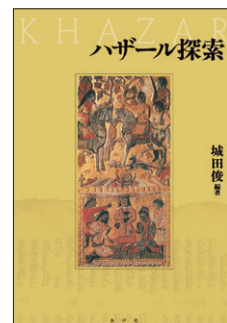
【10月の新刊（予定）】

ハザール探索

城田俊＝編著

【10.13 発売】

▶ロシアやウクライナの地で繁栄した騎馬民族ハザール。ユダヤ教との関わりをはじめとする数多の謎を解明する、ハザール研究＝探索の最前線。ロシア人考古学者による最良の入門書『ハザール——謎の帝国』（プレトニョーヴァ著）、ハザールが遺した数少ない文字資料『ユダヤ・ハザール往復書簡』他を収録！
四六判上製／340頁＋1C別丁8頁／3500円＋税 ISBN：978-4-8010-0776-5



太陽の都市

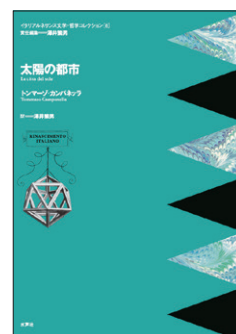
《イタリアルネサンス文学・哲学コレクション6》

トンマーゾ・カンパネッラ 澤井繁男訳

【10.13 発売】

▶教会とスペイン帝国に対して武装蜂起を企図したカトリック僧が、獄中にて執筆したユートピア論。神政政治、結婚と生殖の管理、財産の共有、卓越した科学技術……千年王国到来の予感とともに夢想する、原始共産制社会の驚くべきビジョン。カンパネッラ専門家による鮮烈な新訳。

A5判上製／160頁／2700円＋税 ISBN：978-4-8010-0406-1



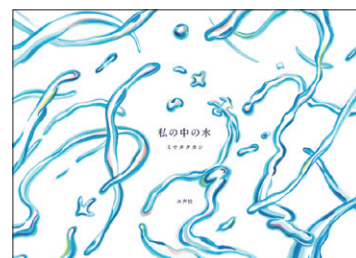
私の中の水

ミヤタ・タカシ

【10.28 発売】

▶水のめぐりに想いを馳せる女の子の、広大なスケールの心象風景を描いた1冊。静謐な文章にのびやかであたたかみのある絵が合わさった、大人も子どもも楽しめる絵本。

A4判上製／48頁／2000円＋税 ISBN：978-4-8010-0894-6



【9月の新刊（既刊）】

すべてがアートになったあと

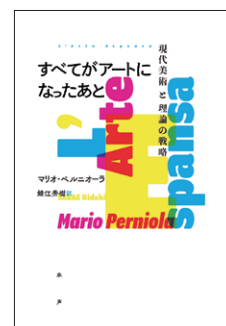
——現代美術と理論の戦略

マリオ・ペルニオーラ 鯖江秀樹訳

【9.3 発売】

▶「誰しものがアーティストになりうる」——アートワールドの境界が決壊へと向かうなか、現代美術は、芸術理論はいかにして可能か。周縁性によって既存の制度的言説を揺さぶり、新たな現代美術の領野を押し広げるための道標の書。

四六判上製／177 頁／2200 円＋税 ISBN：978-4-8010-0883-0



芸術、失われた信頼を求めて

杉田敦

【9.3 発売】

▶激動の国際情勢のなかで、アートに注がれる眼差しは、それを取り巻く社会はいかに変容したのか。ドクメンタ、ヴェネツィア・ビエンナーレ、マニフェスタ、ミュンスター彫刻プロジェクトなどの国際展を経巡り、失われた希望を追い求めた旅路。

四六判上製／396 頁／3600 円＋税 ISBN：978-4-8010-0884-7



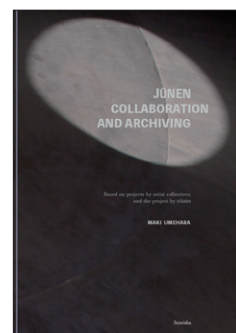
JÜNEN: COLLABORATION AND ARCHIVING

Maki Umehara / 梅原麻紀

【9.3 発売】

▶アーティストの梅原麻紀が、自らも参加するデュッセルドルフとイスタンブールを拠点に活動するコレクティブ nüans のアートプロジェクトを紹介しながら、芸術やアーカイヴを通したコミュニケーションによる知覚の反復運動が生み出すものとは何かを問いかける。

A5 判上製／176 頁／3000 円＋税 ISBN：978-4-8010-0881-6



詩人の場所、星々の時間

——関西マラルメ研究会 20 周年記念論文集

坂巻康司＋中畑寛之編

【9.5 発売】

▶何事も起こりはしないだろう、場を除いては——マラルメの放つ光はあらゆる思考を引きつけ、渦のように邂逅し銀河を形づくる。同時代の批評をはじめ、現代思想にまで届く詩人の光跡を丹念にたどり、その影響と彼らの布置によって浮かび上がる「場」を描き出す。

A5 判上製／477 頁／7000 円＋税 ISBN：978-4-8010-0885-4



総主教ニーコンとその時代

原求作

【9.15 発売】

▶ 300年にわたりロシア正教会を分裂させる教会改革を推進したモスクワ総主教ニーコン。飽くなき権力欲と宗教的情熱を胸に、皇帝の権威を凌駕しようとした魔術師的人物の生涯を、動乱の17世紀ロシア史を背景に克明に辿る。付録として同時代人シュシェリンによる『総主教ニーコンの伝記』を収録。

A5 判上製／360頁／6000円＋税 ISBN：978-4-8010-0887-8



アフター・ネイチャー 《叢書 人類学の転回》

——20世紀後期におけるイングランドの親族

マリリン・ストラザーン 谷憲一＋堀口真司訳

【9.19 発売】

▶ 体外受精と新自由主義がそれまでの家族観を揺さぶる20世紀イングランドにおいて、「家族とは何か」を根底から問い直す。〈自然のあと〉を訪れる、複数の関係的な社会像を描出しつつ、家族人類学の新たな地平を拓く。

四六判上製／418頁／5000円＋税 ISBN：978-4-8010-0723-9



世界の可能性 《批評の小径》

——ピエール＝フィリップ・ジャンダンとの対話

ジャン＝リュック・ナンシー 伊藤潤一郎＋吉松寛＋松田智裕訳 【9.19 発売】

▶ 少年期の読書体験から芽吹き、意味、共同体、政治、宗教、芸術へと枝葉を伸ばした思索が、やがて世界の輪郭を描き出す。その思想史的軌跡と核心を、対話の中で鮮やかに照射する私たちの思考を新たな地平へ押しひろげる、ナンシーによるナンシー哲学入門。

四六判上製／197頁／2200円＋税 ISBN：978-4-8010-0886-1



ヴァージニア・ウルフ『ダロウェイ夫人』を読む 《水声文庫》

——パンデミックからディープタイムまで

秦邦生＋小川公代編

【9.19 発売】

▶ 「意識の流れ」を駆使したモダニズム文学の傑作を、今改めて読むにはどうすればよいか。パンデミック、気候変動、マルチバース、都市空間、トランスナショナル、MeToo運動、存在論・時間論……現代のわれわれに訴えかける作品のポテンシャルを引き出す批評的論文集。

四六判上製／336頁／3500円＋税 ISBN：978-4-8010-0882-3



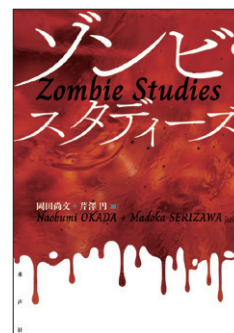
ゾンビ・スタディーズ

岡田尚文＋芹澤円編

【9.25 発売】

▶映画、文学、軍事思想史、大衆消費社会、ポスト・ヒューマニズム……あらゆる表象の舞台を、さまざまな声なき主体の「代弁者」として彷徨うゾンビから、人間は何を受け取ることができるか。人文知を縦横に駆使し、ゾンビを客体化の軛から解き放つまったく新しい試み。

A5 判上製／360 頁／5000 円＋税 ISBN：978-4-8010-0888-5



水声社

東京都文京区小石川 2-7-5 tel. 03-3818-6040 / fax. 03-3818-2437 eigyo-bu@suisaisha.net

ブックカフェ



本の庭
le Jardin des livres

本の庭



緑と本に囲まれて、憩いのひとときをお過ごしいただける、都内でもまだ緑の多く残る山王のブックカフェ『本の庭』にも秋が訪れました。『本の庭』では、水声社の本を展示販売しており、新刊は本屋さんの店頭に並ぶより、10日から1週間ほど早く入荷します。「できる限り手作りの物を」をモットーに、パニーニやケーキ、など、店内の本をご自由にお読みいただきながら召しあがれる軽食、焼菓子や各種スイーツやお飲み物をご用意しています。車椅子やベビーカーでお入りいただけます。テラスでは、ワンちゃんと共に過ごすことができます。

【カフェの情報】

住所：東京都大田区山王 1 - 22 - 16

アクセス：JR 京浜東北線大森駅 山王北口より徒歩7分

営業時間：木・金 12時～18時、土・日 11時～18時。ただし第1・第3日曜日は12時開店です。

営業日：木・金・土・日（詳しくはInstagramをご確認ください。）

Tel：070 - 4171 - 0860

店内設備：スロープを設置できますので、車椅子のままご来店いただけます。

Free Wi-Fi



本の庭
le Jardin des livres

(広告)